

【全体討論】

〈早稲田みな子〉本日は日本で活躍なさっている外国人の研究者の方々による、日本と関連するいろいろな音楽の研究についてご発表いただいたわけです。全体的な討論に入る前に大ざっぱに今日の午後の発表を振り返ってみたいと思います。その後で、私からの皆さんそれぞれに対する、全員に対する質問を投げかけてみたいと思います。

まず、ゴチェフスキさんからは、ヨーロッパとアジアの楽譜についての発表があって、それぞれの発展の仕方を決定付ける要因として、言語そのものの表記法があるのではないかというお話がありました。デヴィッド・ホプキンズさんは、「芸者ポップス」という日本の流行歌の一つのジャンルを取り上げて、芸者が取り上げられたことに関して、一つにアメリカ的なもの、モダンなものという外国の影響に対する抵抗として、芸者ポップスというジャンルが機能していたというお話がありました。エドガー・ポープさんの発表では、アメリカと日本におけるジャズのエキゾチシズムについての比較研究をご紹介いただきました。最後に、ジェームス・ロバーソンさんからは、沖縄とハワイというそれぞれ似通った歴史的な経験を持つ場所、それぞれ南国のパラダイスというイメージもあるとともに、colonialismの犠牲になった島におけるpolitical protestの内容を持つ歌についてご発表いただきました。

ロバーソンさんの発表に対するディスカッションの時間がなかったので、この全体討議の時間の後でその時間が持てればと思います。そのほかの発表についての討議は、各発表の後にある程度ありました。全体討議を意義のあるものにするために、各研究を総括できるようなディスカッションの方向を考えました。それぞれのトピックがいろいろなので、どのような趣旨に持っていったらいいか悩みました。このシンポジウムそのものの趣旨が、外国人研究者による日本に関する研究ですので、非常に大きな枠ですが、外国人として日本文化を研究するという点について、それぞれの方にお話を伺いたいと思います。

私が皆さんの発表を聞かせていただいて、何か共通することがないかと考えたときに、日本の研究をしているのですが、日本と日本の外のものととの比較があったのではないかと思います。ゴチェフスキさんは、アジアの楽譜とヨーロッパの楽譜という比較がありました。ポープさんからは、日本とアメリカにおけるジャズのエキゾチシズムということで、日本のエキゾチシズムとアメリカのエキゾチシズムという二つのものの比較。ロバーソンさんは、日本の一部である沖縄とアメリカの一部であるハワイの両方を取り上げていました。ホプキンズさんは「芸者」というトピックでした。日本と日本の外

との比較とは少し違うかもしれませんが、芸者に関してはエキゾチシズムとの関係がポーブさんからも指摘されました。エキゾチシズムというのが、またひとつ皆さんに共通して出てきた概念ではないかと思います。芸者というのは、外国人が考える日本のエキゾチシズムの典型的なアイテムの1つなので、ホプキンズさんが外国人としてエキゾチックな芸者を扱っている、その外の視点があると思います。ポーブさんの研究はもちろんジャズのエキゾチシズムということでした。ロバーソンさんの研究も、沖縄とハワイという、ポジティブなトロピカルというイメージと合わさった、エキゾチックなイメージを持たれている場所におけるpoliticalな歌ということで、エキゾチシズムというのも皆さんにみられた要素ではないかと思いました。

外国人として日本のものを研究する場合に、私の察するところ、エキゾチックな対象としての日本というのが、皆さんの興味のきっかけ、研究のスタートラインにあったのではないかと想像します。しかし、ポーブさんの発表でもありましたように、エキゾチックなものというのは、そこに入り込んでいくにしたがって、familiarなものに移行していくわけです。ですので、ここで日本と日本の外との比較を考え合わせても、outsiderとして研究しているものが、だんだんinsiderの視点になっていく。Exoticからfamiliarへの視点の移行が、研究者にとってあると考えられると思います。

皆さんそれぞれの研究と照らし合わせてお答えいただければと思うのですが、外国人として研究することが、皆さんの研究にどんな影響を与えていると思われるか。それぞれ個人的なバックグラウンドの違いが、研究の視点やアプローチに影響すると思いますが、その個人的なバックグラウンドの一つの要素として、外国人であることが影響しているのかしていないのか。しているとすれば、メリット、デメリットがあるのかどうか。これが1点です。もう一つの質問は、皆さんが研究していく上で、Exoticだったものがfamiliarなものへとになっていく。また、outsiderであった自分がかかなりinsider的な視点を持つように移行してきていると思います。自分の立場の変化が、自分の研究の視点やアプローチにも影響を及ぼしているか。この2点を、それぞれの皆さんの経験と照らし合わせてお答えいただければと思います。

〈H. ゴチェフスキ〉私は日本と出会い、日本の音楽を研究するようになったのは、全く個人的な理由で、研究への興味ではありませんでした。しかし、実際に研究すると、本格的な興味はいろいろ出てくると思います。最初のきっかけは、そういう全く個人的なものだったのは間違いありません。

最近考えているのは、私は日本に来てどう変わってきたのか。私は2年半ぐらい前までずっとドイツにしながら日本の研究をやりました。実際に日本

に住むようになるまでは、私は外国人ではなくて日本が外国でした。今は、自分がここで外国人になったことで何が変わるかといいますと、学問の中で、対象とする話の相手が、以前はドイツ人だったのが今は日本人だということです。以前も日本人の学者と話したことはたくさんありますが、日本人の学者と話をするときには自分の専門分野の中の人ということで、同じ日本の洋楽を研究する人だったのですが、今は全く音楽研究者ではないとか、全然違う分野の人たちとたくさん交流を持って、自分がどこに位置するかを考えないといけない。そこでかなり大きく変わった。自分はドイツ人であることを意識してきたのが一番強いのではないか、自分がヨーロッパ人であることも含めて。ですから、最近日本に来たからこそ、西洋の文化に非常に興味がいって来たということがあります。

〈D. ホプキンズ〉僕は仕事として、アメリカの文化と歴史と文学を日本の大学生に教えている。長くやっているのだから、教え方として、日本との比較がよりよく見られたら分かりやすいと思って、日本の文化と歴史と文学を勉強するようになったと思います。でも今の若い日本人は、日本の歴史と文化と文学にはあまり詳しくありません。エキゾチズムの問題は、僕はダブルのエキゾチズムを持ってしまうこともあります。特に音楽の研究、僕は昔からレコードが好きでSP盤に興味があり、現代の音楽がどこから来たのかを知りたくて、もっと古い音楽に少しずついく。友達の輪の中には音楽を知っている人もいない。音楽に詳しいのは業者ぐらいです。多分、僕には外人だという意識も最近ないのではないかと思います。分かりません。自分がエキゾチックだと思います。日本にいて僕はエキゾチックだと思います。日本はもうエキゾチックではない。現代の若者の文化はエキゾチックになってきたかもしれない。

〈E. ポープ〉私が日本に携わってきたのは偶然のことでした。昔は音楽を勉強し始める前に生物統計学をやっていました。その関係で日本で仕事をする可能性が出てきて、それは最終的にできなかったのですが、その準備として日本語を勉強し始めて日本の文化にも興味を持つようになった。でもよく考えると、その前から、多分中学生ぐらいのときに「禅宗の仏教」について読んでいて、自分で座禅をやるようになって、その関係で仏教関係の日本文化に興味を持つようになった。必ずエキゾチズムが一部だったと思います。エキゾチズムの入り口として、日本文化の研究に入り込んだと思います。

私は11年間ぐらい日本に住んでいますが、外国人として日本の文化を研究するには言語が一番の壁です。ある程度読み書きができるようになりましたが、読むのは英語と比べるとかなり遅くて、山ほど読みたいものがあった

もなかなか全部読めないことが、今でも難しいところです。8年ぐらい前に日本人の女性と結婚して、エキゾチズムとしては人間関係の中でもあると思います。ずっと一緒に住んでいても、いつまでもお互いの言語やお互いの考え方の中で、エキゾチックな雰囲気かなにか分からないことが残っているから、エキゾチズムの知らないことを少しずつ知るようになる過程がいつまでも続きそうです。

〈J. ロバーソン〉外国人であって日本にいて、日本について研究している人としてのメリット、デメリットは何なのかという課題ですが、僕の場合、日本について研究していると言っても、今日の発表のように日本よりは沖縄です。二重になっているわけです。今、ポーブさんが話したように、一つの課題として言語です。沖縄になりますと、方言になるわけです。僕の大きな課題の一つはその方言をどう理解できるのか。僕はまだウチナーグチから直接翻訳できないのです。沖縄の方をお願いして説明していただくか、日本語訳を基にして英語に訳しているわけです。その言葉のニュアンスとか、その言葉の歴史などについての知識不足があります。

逆に日本について話しますと、僕は音楽学ではなくて、専門としては文化人類学なのです。日本の中小企業に勤めている人たちのライフサイクルについての研究をやりました。今ですと、沖縄ではなくて、日本について音楽に関して研究しようとしたら、多分身近すぎるのです。日常的に既に慣れているわけですから、もう何が日本的なのか分からなくなっているような気がします。うちの小さな大学にアメリカの留学生は一人しかいませんが、その学生と日本の音楽、ポピュラーミュージックについて話しますと、彼女は「これはすごく面白い、これはexciteである」と言っているところに、僕自身は「それはずいぶん昔のことだった」と感じるのです。ですから、exciteなものが身近なものになってきたというプロセスがあります。

〈早稲田〉その逆の日本とアメリカの関係、日本人から見たアメリカという視点、日本にとってのAmericanismという視点については、皆さんはどうお考えでしょうか。

〈ホプキンズ〉僕が思うのは、日本とアメリカのような二分対立的な考えは、研究の出発点としてはどうかと思うことがあります。僕はアメリカ人ですから、アメリカと日本を比較するのですが、外国はどこにあるのか。アメリカにあるのか。それによってヨーロッパはどうなるのか。これは細川さんとポーブさんのジャズに関する研究に関係するのですが、ヨーロッパのジャズはどうなのか、上海や中国の戦前のジャズはどういうものなのか。フィリピン人の話も出ましたが、アジアの人たちが日本のジャズにどう貢献しているの

か。どういう立場で貢献しているのか。ジャズの話になると、アメリカが中心になるのは分かるけれども、もっとヨーロッパとアジアを含めた比較、研究をすればどうかと思います。僕もアメリカ人として、それをやらなければいけないような気がすごくあります。

〈意見〉日本で見るアメリカの文化は、あくまでコマーシャル、アメリカの文化中心です。あれだけで、アメリカ人らしさやアメリカの本音、アメリカの心理とかを計るのは非常に危ないことです。でもほかの手掛かりがなかったら、それだけで判断しないといけない。先週、僕はアメリカで「Popular Culture Association」の大きな学会に行って、そこで三つのアニメと日本の漫画についての発表を聞きました。すごく不思議がって、アニメでしか知らない日本像、漫画でしか知らない日本像、同じようにすごく極端なものになっている。大宅壮一の引用もしましたが、大宅壮一の昭和元年ぐらいのエッセイで「大阪は日本の米国だ」と書いていて、単純にアメリカは「何でも許す」「行儀が悪い」それぐらいのイメージです。多分、そのまま80年後に同じようなイメージが残っているのではないですか？僕がポープさんに聞いたのは、アメリカのポピュラー音楽の中で、中国と日本の区別をするのですか。しないでしょ。

〈井上貴子〉Japanismの話とかいろいろ出たので少しまとめて話してみたいと思います。まず、日本のポピュラー・カルチャー、特にアニメやドラマ、ポピュラー音楽といったものが日本の周辺諸国の中国や台湾や東南アジアなどで非常に流行して、日本のポピュラー・カルチャーのスタイルが模倣されてきました。つい最近も台湾で、哈日族と呼ばれる日本ファンが話題になりました。こうした現象は、「Japanization」と呼ばれ、数年前に既に議論されています。どういうかたちで理解されているかという点、「Americanization」がまずあって、それが日本の中でdomesticateされた結果としてのJapanizationというかたちで、理解されています。つまりゼロからのJapanization、日本化ではなくて、アメリカの文化が日本でdomesticateされた結果、二重のステップを踏んでアジア各地に広まったとよく言われるのです。なぜ広まったかという理由としては、アメリカ的なイデオロギーが排除されたためだとよくいわれます。Americanizationのとき、つまりアメリカ的なものが日本に入ってくるときに、アメリカの文化は、常にライフスタイルはこうあるべきとか、民主主義であるとかいったイデオロギー的色彩、政治的な色彩を伴っていました。だけれども、日本でdomesticateされる時点で、そうしたアメリカの政治的イデオロギーみたいなものはすべて取り去られてしまった。だから、植民地支配を日本が行ったところの被支配地においても、日本のポピュラー・カルチャーが受け入れられたのではないかという議論が

されてきたと思います。

あともう一つ。先ほど言われたロバーソンさんのオリエンタリズムとエキゾチシズム、私はそこにジェンダー論とかもかかわってくると思います。そこで一番問題になっているのは、不平等な権力関係が常に投影されていること、何重にもレイヤーになって投影されていることです。ジェンダー論とは基本的に権力論ですから。18世紀や19世紀のエキゾチシズムについていえば、ヨーロッパによって植民地化されているような地域の文化をヨーロッパ人が見たときに、それに対してエキゾチックなフィーリングを持ったわけです。オリエンタリズムは、基本的にはヨーロッパのヨーロッパ自身の過去に対する憧憬がオリエントに投影されること、つまり、他者であるオリエントを再解釈した上での受容であることを考えると、常に不平等なパワーバランスがそこに働いていることを考えなければいけない。ある文化をエキゾチックに感じるとしたら、自分自身のなかにそれをノスタルジーに転換できる回路があるからでしょう。エキゾチックだと思うものを自身の過去に投影しているからこそ、ノスタルジーを過去の時間をとり戻すことによって自己に投影しているからこそ、ノスタルジーへの回路ができるのだろうと思います。

〈ゴチェフスキ〉アメリカという名前が出ただけで興味を示さないというのは、ドイツ人としてのアイデンティティの一つだからで、私は何の知識もないし、研究も全然してきていないのです。日本のAmericanismの話聞いたときに一番気がつくのは、ドイツも同じだということ。そういう場合には、日本とドイツは非常に似た立場にあるということです。ジャズの問題、ジャズはどういうふうに関与されたか。モラルが通じない音楽として受け入れられたとか。それはドイツもそうです。一般の社会には変な音楽として扱われる。それもドイツと一緒にです。

実際に細かい違いはいろいろあると思うのですが、基本的にそういう場合には世界はどういうふうに対立してきているかということ、ほかの国のことはよく分からないのですが、「アメリカ」と「アメリカ以外の世界」ではないかと思います。ですから、その場合には日本とドイツは同じ側に立つ。私はどちらかというとその状況に興味を持っています。いろいろな歴史的な状況に、世界を二分裂するのはよくあることだと思います。明治時代の資料を読むと、「洋の東西」とかが書いてある。東西は何か。東洋はどこにあって西洋はどこにあるかといいますと、実際に明治の文献を読むとびっくりするほど中国が西洋になっている場合があります。東洋というのは日本で、外国の音楽を受け入れるのは意義があるという話になって、西洋音楽と中国音楽を今から勉強しましょうと。インド音楽とかも出てきます。そういう場合は、日本は二つに分けて、外国はすべて西洋になってしまう。そこまで言わない

かもしれないけれども、そういう傾向がある。普通はアジアの文化とヨーロッパの文化とか、ドイツ人の立場から分けると思います。キリスト教文化と非キリスト教文化、イスラム教はどこに立つかという問題が出てきます。そういうふうに分けるのですが、日本人の明治時代の目では明らかにそうではなかったような気がします。日本人には、アジア人としてのアイデンティティはあまりなかったような気がします。「洋の東西」と言っているけれども、そこでの東洋は中国や韓国を入れての東洋ではなかった。

今度、Americanismの話をしたら、日本人は直感的にアメリカ対日本と思うかもしれません。実際には「アメリカ」対「日本」ではなくて、「アメリカ」対「非アメリカ」ということで、ドイツは全く同じような問題を抱えているような気がします。

〈ポーブ〉それもエキゾチシズムのコンテクトによつての受け入れ方という問題にもかかわると思います。アメリカのポピュラー音楽や映画などが世界中に広まって、アメリカがエキゾチシズムの生産大国であると同時に、映画や音楽の輸出によってエキゾチシズムの世界第一の対象にもなったのだろーと思います。そのアメリカのポピュラー音楽や映画が、ドイツと日本とほかの国では、そのコンテクトやそれぞれの政治的な状況などによっていろいろな解釈があつて、そういうこともエキゾチシズムの比較研究の対象になるべきだと思います。

〈細川周平〉私が言いたいことを少し言います。この「在住日本研究者が語る」という企画の趣旨をあまり理解していませんでした。「近代日本についてみんなで話そう」「エキゾチックなものについてみんなで話そう」「沖縄音楽についてのシンポジウム」「戦争と音楽についてのシンポジウム」「楽譜についてのシンポジウム」。そういったことならば、もっと乗り気でいろいろな人にも声をかけたのですが、最初に国籍によって参加者が限られているのは、どうも好まなかったわけです。

しかし考えてみれば、こうやって皆さん4人の体験談を聞きますと、少しはエキゾチックなものを考える上ではこういうのが良かったのかもしれないと思います。皆さんにエキゾチックなものを語ってくださいと、こちらから依頼したわけではありませんが、結果として少なくとも2人のペーパー、僕のも入れたら2本半ぐらいがそういうテーマに触れたために今こんな議論になっている。これならば、外国人の意味があるのかもしれないと思っています。

それから、理論的なことでポーブさんにお聞きしたいのですが、僕自身は「foreignなものがfamiliarになるプロセスである」という定義には少し抵抗があります。英語の「foreign」という言葉は非常に多義的で「Foreign

Scholar」といったときには国籍について言っているわけです。僕が美術について話したとしても「foreign」とは言われないわけです。美術史の専門ではありませんけれども。このタイトルの場合の「Foreign Scholar」は国籍に関係している。しかし、エキゾチックな場合の文脈では、もっと違う複雑なことがあるというのを聞いたわけです。それに対して、「Foreign Scholar」があるなら「Familiar Scholar」はいるのか。いないわけです。日本語で考えてみると、「exotic」というのは「異国趣味」と訳されます。「exotic」という言葉には、国という言葉はどこにもないわけです。異国の国を抜いて、異趣味や異的、外的と訳すべきところを、いつの習慣か知りませんが、国のレベルで考えるという発想になっています。こういった翻訳体系、言語の体系が前提にある限り、最終的になかなかみ合わないわけです。おそらく「foreignがfamiliarになるプロセス」というよりは「違いが見えなくなるプロセス」とか、「違いが無になっていくプロセス」「気が付かなくなっていくプロセス」とか、そちらのほうが当たっているような気がしました。「foreign」があまりに包括的な言葉であるからです。それは僕の言葉に対する見方でした。

〈ポープ〉私も実は「foreign」という言葉に関して少し悩みました。ほかのいい言葉があれば、ぜひ教えてください。

〈意見〉「Alien」ではないですか。

〈ポープ〉「Alien」はもっと排他的な感じがするようになります。

〈細川〉「foreign」のことを言えば、多分ポープさんが言いたいのは珍しいもの、自分ではないものという意味があるわけです。ということは、必然的に新しいもの、日本語では「目新しい」と言います。「目」という。「耳新しい」という言葉はないのですが。視覚的に「目新しい」。ということは、「foreign」であること自体が既にモダン、新しいものということが談議されているわけではないでしょうか。近代というのが、新しいものを次々に欲していくプロセスであるということによく言われます。そうした中で、1920年代の日本人にとっては、ジャズもモダンでforeign。19世紀のドイツ人にとってバタフライも——バタフライは20世紀。だけど、芸者も蒸気機関車もforeignでモダン。結局、モダンという言葉が「foreign」の中に入っているような気がいたします。

〈ポープ〉私が「foreign」という言葉を使いたい意味は、必ずしも時代によって限られているものではありません。近代の前、1,000年前に人間が違う文化のものに接触するとき、それについてはどんな言葉を使ったらいいのでしょうか。私が考えると「foreign」が一番neutralで一般的に使えるものではないかと。

〈山内文登〉僕もコメントの中で「foreign」という部分が多少気になったというか、面白いと思いました。すごくシンプルな定義なので、それ自体は意義があるし、これから考えて理論化していく上で、ポイントを突いた定義だと思いました。ただ、「foreign」「foreignness」と言ったときに、僕が最初にpower relationの話やorientalismの話をしたときに、念頭に置いたのは、最近の社会科学的に言ったら「otherness」とか「difference」とか。こういった問題になってくると、それこそ先ほどおっしゃったようにneutralではなくて、もう少しpower relationが入ってきて「他者化」のメカニズムであるとか、それを通じてそれこそdomesticationとかとも関連してくるので、その辺は議論していくべきだろうと思います。foreignnessと言うとき、良くもなく悪くもなくというエキゾチシズムを定義する上では非常に適切な用語なのかと。そう定義することによって、多少そこに絡んでくるであろう力関係の非対称性みたいなものが多少弱くなるのであれば、見られなくなくなるのであれば、なんらかのかたちで必要になってくるのかと思う。

〈ポーブ〉最初から定義するものとしては、power relation、力関係とエキゾチシズムとの関係がまだそれほど詳しく研究されていない状態で、そのつながりを定義の中で固めるのはよくないかと思います。

〈ゴチェフスキ〉私が思うには、こういう「foreign」の考え方というのは、私としては「あなたたちと違う」というのは我慢できる、それは問題ないのです。私が気になるのは「では、あなたたちはみんな同じか？」という問題です。それは、私は非常に嫌なのです。違う人に「私は日本人だから」と言われたときに、いつもそれは言わないようにしてほしいという気がします。日本人もみんな違うバックグラウンドがある。関西の人と関東の人もいるし、いろいろな社会関係の人がいる。教養がある人と教養のない人、いろいろなタイプの人がある。外国に行った人と帰ってきた人、外国に行ったことのない人とかいろいろある。もちろん沖縄の人みたいに、本当は日本人ではないと言ってはいけませんが、本当に日本人かどうかというまた疑問になるような人です。そういういろいろ政治的な問題も絡んでいます。そういうことに対して、「foreign」という言葉を私に使われると、「では、あなたたちはみんな同じか？」という気持ちを持つ。それは、私としてはあまり好きではない、そこが問題だと思います。私は特に音楽学の議論で、本当にいろいろな人に会ったことがあります。日本の音楽を非常によく知って本当に日本の音楽文化を深く身に付けている人、日本の音楽が西洋音楽と違うということさえ聞いたことがないような人、いろいろな人がいる。なぜ、私が「foreign」なのかと思う。

〈早稲田〉「foreign」という言葉ですけれども、英語の使い方だとうい

価値観が付いているか私ははっきり分かりません。細川さんの、新しいもの、モダンなものという意味付けというのは、日本人がforeignと使ったときに言うものなのか、英語としてそういう意味が含まれているのかという疑問があります。今、ゴチエフスキさんがおっしゃったように「foreign」を「外国の」と訳したときに「新しいもの、モダンなもの」というポジティブな意味と、「外国の」という日本以外のものすべてをひっくるめた「排他的」なネガティブな使い方と両方あるような気がします。英語には、そういう観点が付いているのでしょうか。もしかして、言葉の解釈の違いなのかと。

〈稲賀繁美〉この会合は「Foreign Scholars Resident in Japan」と題されています。なぜこうなったのかという説明を簡単にします。日文研主催の会議には、もちろん国内にお住まいの日本国籍の研究者は参加できます。外国から外国人の日本研究者を呼ぶこともできます。ところが、これには二つ抜け落ちるカテゴリーがあるのです。一つは、外国にいる日本人を呼ぼうとすると、先ほどの鶴田さんのような国籍条項問題が起こります。もう一つの問題は、外国にいる日本研究者は呼べるわけですが、国内の非日本国籍日本研究者を呼ぶ枠がアドミニストラティブに保証されていなかったのです。逆差別になってはいけないのですが、せっかく日本にいる日本国籍でない研究者を呼ぶためには、こういう倒錯した設定をするしかない。そのデメリットは、今細川さんの指摘されたとおりです。ここに将来の課題が残っています。あとは、この2日のまとめを簡単にさせていただきます。

音楽教育においては、1890年は東京音楽学校は西洋楽一辺倒だったのです。伊沢修二が主に責任者だと思います。詳細は省きます。そこに邦楽が取り入れられたのは1936年。「二・二六事件」の年でした。ですから、邦楽を日本のinstitutionに入れること自体が、実はもう国家社会主義というnationalismと密接な関係を持っていたわけです。

昨日は芸術の話でした。1890年に東京美術学校が設立されたときには、「日本画」というものを新しく創成、inventしたわけです。そこでは当初「Oil Painting」「European-style Painting」は排除されてしまった。つまり、美術と音楽と並んで、Europeanized institutionを取り入れた段階で全く対照的なことが起こっているわけです。もう120年以上昔の話ですが、120年経ってもその分岐した航跡のtraceをまだ引きずっているのではないかと、この二日聞いて思いました。

あと一つ。1890年に明治憲法が導入されます。『岩間の清水』というのを聞いたことがある人はいらっしゃるでしょうか。私の記憶が定かなら、このときに取り入れられた文部省の唱歌のひとつです。これを記念して浮世絵がつけられています。そこにスコアが描かれている。日本の詞はもちろん縦書きに

なっています。ところが五線譜に載せるためには横書きにするしかない。その両方が juxtaposeされている。われわれは今当たり前だと思っていますが、当時の日本人にとってみれば随分不思議な表記法上の混乱が起こったと思います。それがヨーロッパの音楽を取り入れた光景として描かれているのです。しかもこの洋風の横書き表記は、洋風の油絵ではなくて浮世絵で、つまり、Japanese styleで描かれている。ここだけでも何が「日本」であるか。それをどのようにしてrepresentするかという問題が、音楽と美術の世界の交叉の中できわめて錯綜したかたちで発生している。これは一つの例にすぎませんが、その辺りを出発点にしてさらに議論を先に進める可能性もあるのではないかと思います。

〈細川〉どうもありがとうございました。この辺で議論を終らなければなりません。こういう通例で、いつも白熱したところで打ち切るのが少し残念です。今回は発表者の方、討論者の方、短い準備期間でしたが、よく来ていただきました。この企画にはケチを付けましたが、来てくださったことに心から感謝したいと思います。フロアの皆さんも思った以上に多数お越しいただきどうもありがとうございました。それでは、これで終わりにしたいと思います。長い間ありがとうございました。同時通訳の方、本当に大変なお仕事に付き合っていただきありがとうございました。